

水稻のは種・育苗管理について

本田での生育期間が短い麦あと栽培では、活着が良く旺盛に生育する充実した中苗を育てることが、高品質、安定多収のために重要です。

1 目標とする中苗

育苗日数25～30日、葉齢3.5～4.0で草丈18cm前後のがっちりした苗の育成を目指します。

2 種子準備

毎年、採種ほ産の種籾を購入します。品種固有の特性を發揮する健全な種籾を使うことが安定多収につながります。

3 計画的な種作業

田植えから逆算して育苗25～30日、浸種7日を目標に、植付35日前までに消毒を済ませます。

(1) 比重選

充実した良い種籾を播くため、表1のような塩水か硫酸水を作つて比重選を行います。沈んだ種籾を水で良く洗って使います。消毒の前

表1 比重選 (水10%当たり)

種類	比重	食塩	硫酸
うるち	1.13	2.1kg	2.8kg
もち	1.10	1.5kg	2.0kg

表2 薬剤による種子消毒の例

薬剤名	対象病虫害	希釈倍率
ヘルシードT フロアブル	いもち病 ばか苗病 ごま葉枯病 もみ枯細菌病	200倍
スミチオン 乳剤	イネシンガレ センチュウ	1,000倍

表3 は種量 (中苗・1箱当たり)

	30箱/10a	20箱/10a
乾 籾	80～100g	120～150g
催芽籾	100～125g	150～190g
容 量	160～200ml	240～300ml

に良く乾かします。

(2) 種子消毒

病虫害防除のために、温湯消毒か薬剤消毒を必ず行います。

① 温湯消毒

いもち病、ばか苗病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウに防除効果があります。種籾を60℃の温湯に10～15分間浸漬し、その後は直ちに冷水で冷却します。消毒後、清潔なシート等で乾燥させ、清潔な冷暗所で保管します(1か月程度保管可能)。

② 薬剤消毒

表2を参考に、希釈した薬液を種籾容量の2倍を目安に準備し、種籾を24時間、薬液に浸けます。

(3) 浸種

種籾に十分に吸水させます。浸

種は、発芽をそろえるための重要な作業です。

種籾容量の2倍以上の水を用意し、「100℃÷平均水温÷日数」を目安に浸漬します(例・平均水温15℃の場合、7日間)。

水温が均一になるように、時々水をかきまわし、種籾に酸素を与えます。

水はなるべく入れ替えないようにしますが、酸素不足となり、泡が発生した場合は、ゆつくりと水を交換します。

薬剤消毒の場合は、

消毒後、水洗いせずに浸種し、3日間は水を入れ替えないようにします。

(4) 催芽(芽出し)

種籾の出芽を均一にさせるため、種の前の一晚(12～20時間)は、種籾を28～30℃の温水に浸漬し、はと胸(芽が1mmくらい出た状態)にします。

(5) は種(籾振り)

は種量は、表3を参考に薄播きを心がけます。

床土を入れ、は種前に育苗箱の底から水がにじむまで十分かん水してからは種し、覆土します。覆土後、かん水は行いません。

苗立枯病やムレ苗防止のため、

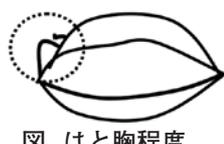


図 はと胸程度 1mm位の芽

タチガレエースM液剤を500倍に希釈し、は種時に育苗箱1箱あたり500ml灌注します。

積み重ね法による簡易出芽を行う場合には、覆土後、1～2時間日光で温めてから積み重ね、ビニールで被覆します。

4 育苗管理

幼芽が10mmになるまでは被覆して昼夜30℃を目標に管理します。

幼芽が10mm位になったら苗箱を広げます。苗代かき後、苗床が羊かん程度の硬さになったら、苗箱を苗床に並べ、苗箱を押し付けて床面に密着させます。水は踏切溝までとし、床面にはのらないようにします。

本葉1葉までの3～4日間は寒冷紗をかけて強光を避け、昼20～25℃、夜15～20℃を目標に管理します。その後は徐々に日光・外気に当て、馴らします。

5 病虫害防除

品種や地域の特性、気象条件に応じて適切な育苗箱施用剤を活用し、本田での病虫害防除の軽減を図りましょう。

※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認しましょう。

記載農薬は、平成30年1月4日現在の登録状況に基づいています。